殘花集園

（日本幼兒教育史資料）

東京女子高等師範學校教授　石川　謙

一　『子供大よせ』

子供の生理衛生を研究したものは言ふまでもなく、子供の心理・子供の言葉から子供の遊戯・玩具などに至るまで、子供について觀察し記述したものは、江戸時代には江戸時代なりに中々澤山ある。然し、幼稚園の遠い先祖とも見れば見られる樣な企や施設があつたかと言ふことになると、この方面に關する研究の、日の未だ淺い私には、餘り見出されないのである。こゝに紹介しようとする子供大よせも、動機や精神やの上からは、到底幼稚園と日を同じうして語り得べきものではない、家庭の手から引離して子供を預り、大勢を一堂に會せしめて自由に遊ばせる仕組に於いて、形の上で多少似通つた點がないでもない。唯々それだけの興味で、日本幼兒教育史資料の最初に子供大よせを取扱つて見たのである。

今から百六十六年程前の安永二年に出版せられた『世間小兒養育氣質』と題する書物の下に「難波より遙々と花の都の隱居所は兒櫻の馬場の邊り」（卷之五、第二）と銘打つた一章がある。その一節を取出して讀むと、次のやうな言葉がある。

「中京姉小路と申所の町住人布袋屋德右衛門と申す仁。中々愚僧などが及も寄(ら)ぬ神妙なる小兒好。中年迄は面白も勤められしが。當秋より實體なる息子に名前をゆづり。剃髮して幻心と改名し町內に隱居し。每日諸方より緣を求めて。二歲・三歲より七つ八つ迄の小兒を集め。今年ぞ思ふまゝの子供遊。愚僧も參りて折々無我にたのしむ小兒の愛をいたし申す。」

この文章は、當時實際にあつた事柄の寫實では無論ないが、さりとて突拍子もない出鱈目な空想ばかりでもない。寫實と空想との切線を歩く小說である。話の主人公は京都の富商布袋屋德右衛門といふことになつて居り、主人公の

噂を吹聽する者はえたいの知れぬ僧侶(實は狩野法眼元信の描いた繪の中の布袋の精)である。神妙に噂を聽入りながら心躍らせてゐるのは、これも子供好きの、永井寶順と名乘る樂隱居である。「當秋より…町內に隱居し、毎日諸方より緣を求めて、二歲、三歲より七つ八つ迄の小兒を集め、今年ぞ思ふまゝなる子供遊」。といひ、「愚僧も參りて折々無我にたのしむ小兒の愛をいたす」。といふからには、唯一度限り思ひ付いたに過ぎぬ子供會ではない樣に讀み取られる。毎日諸方から子供を狩り集めたものゝ如くである。さうかうする中に此の記述の中心となる、ごえらい大規模な子供大よせが催されることゝなつた。

「則(ち)明日は幻心方にて小兒の大よせ。愚僧も參りおるほゞに。彼隱居へ向(け)て御出あれといわれしかば。寶順大きに悅んで、いよ〳〵參るべしとの約束。(京都知恩院門前の邊りの樂隱居、永井寶順、歸宅して後)……明日の出合を待兼(ね)退屈の體を。手代が見付(け)て心を配り、近所の小兒を呼にやれば、隱居に出入る豆腐屋・八百屋・魚屋の子供のぐはんぜない共が來て是をまぎらし」。

これで見ると、寶順は自分の家にも隣近所の子供を搔き集めて、ぐはんぜない共と遊ぶことを樂しむ癖があつたものと見える。

「明る日になれば四つ時分をまちに待て支度をし。下男一人供につれて彼酒屋の隱居へさして急ぎ。程なく隱居の新宅の門口へ案內乞ふて。西山の和尙に小兒大よせの趣向を聞し由いひ入ければ。主人幻心とんと覺ない西山の和尙なれど。幻心といふ名を知り、其上今日新宅振舞とて。幼子供の大寄を催する事を聞たる不思議。あやしみながら先其人を是へ通しませと家來にいひ付。我も次まで出迎ひしが。中々人柄なる隱居の體。座敷へ通して樣子を聞く程一つも覺へのなひ事斗。客も亭主もあきれしが。小兒を好人。殊に名所のしれた隱居なる故。先ふしぎは格別箇樣に御出合申すも他生の緣。今日は是にて御遊被成といふ中。」

訪うた寶順と訪はれた幻心とは互に知らぬ仲であり、寶順を此の隱宅まで手引したといふ僧侶については幻心の方に全然心當りがないにも拘らず、お互の子好きが取持つ緣で、主客二人は打くつろいで今日の子供大よせを樂しむことゝなつたのである。

「はや段々に寄來る近所・町內・隣町まで知るべの子供。三つ四つになる子供には親が付しもあれば、又乳母の付しもあり。六つ七つ八つは丁稚を連れたもつれんもざわ〳〵と一時に五十人ばかり。十六疊敷きの座敷へ出。次ぎの拾疊八疊の小座敷まで遊びめぐる體。是を見ては寶

順も座敷を立ち兼ね。亭主幻心が詞につゐて座をしめてぞ咄しける。扨て子供の悦ぶ樣に氣を付し座敷しつらひ。七福神の繪を染込みし幕を張て座敷は殘らず毛氈を敷きつめ。走り勝手の能き樣にと何れの毛氈にも鋲を打。床の懸ものは布袋大籠の切だめに。秋の草花を種々大ふさに入れて。花を望む子供には取らす積り。中座敷の內壘。二でう程白砂にしてすやきの人形。さいしきの雀鳩・馬・牛・猫・犬・鼠の土細工を竝べて是も氣儘にさらせる馳走。庭は泉水つき山ぐるりを芝にしてまばらに花毛氈を敷。怪我をせぬ樣にそれ〳〵役人を付。先づ子供の四つ五つより上は落着に饅頭一つ宛さらせて。二つ三つの子供にはしるあめをねぶらせ。子供の親或は乳母小女郎丁稚に至るまで中飯夜食色々の馳走。食あたりにてもあらんときの用意に。小兒科の醫者と鍼さすりの上手を賴(み)置(き)。殘る所なふ氣を配ばりて。幻心年來(の)望みの慰み一世一代の趣向なるが。成程福の神と一門に成た心持がして、ごふもいはれぬ面白さ。よねん無ふ大勢の子供が遊ぶ體。中には一休みして乳を吸ふ子もあり。若きときより大阪にても樣々の樂に金銀を入し寶順も。此趣向には手を取り感にたへしもことはりなり」。

醉興が過ぎての子供集めとも見えて、この子供大よせには教育的動機が見當らないし、子供への理解がごの程度のものであつたかも甚だ不明である。とは言へ、家庭から離れては何程の養育施設をも惠まれなかつた當年の幼兒に對しては、「子供大寄せ」は慥かに天來の福音であつたに相違ない。殊に子供の天性に目覺めて、自由に、思ふがまゝの遊を思ふがまゝの勢ですることの出來るやうに仕組んだことは、大人らしく朕ける方ばかりに氣を取られ勝だつた一般風習への警告にして意味が深い。

（昭和十三年十月三十一日稿）

教育としての學校衞生

醫博 竹村一 著

發行所 大阪市東區船越町二ノ四七 日本學童保健協會

著者竹村博士は本誌にも屢〻御執筆下さいました幼稚園衞生の權威でいらつしやいます。

本書は書名によつても分る樣に、醫學的立場からのみ論ぜられたものではなく、教育行動としての立場に於て廣範圍から學校衞生を論ぜられた、興味深い御研究御考察であります。

書中「幼稚園への私の希望」と言ふ一章を設けられ、幼稚園の變遷から說き起し幼稚園衞生はかくありたしと述べられてあり、實に教育としての學校衞生に終始してゐます。

事變下にあつて、幼稚園の目的を再檢討せねばならぬ秋、本書はどんなにか有益なる參考資料となり得るか、是非御一讀をお奬めする次第であります。（記者）